

四月一五日（土）

学食のいつもの席で、いつものように弁当を広げる。ぼーっと目の前に広がる光景を眺めながら、焦点を合わせることもなく、ただただぼんやり頭を休める。

なんだかんだと、色んなものに首を突っ込んでいて、実家にそれほど頼らなくても苦もなく生活できているのと、楽しいのは間違いないが、仕事と仕事未満と勉強との狭間で、今年に入って休まる瞬間がめっきり減ってしまった。

転部によるキャッチアップも必死にやらなきゃいけないけど、みいちゃんたちの「コビトカバチャンネル」も手は抜きたくない。Zサイズの業務も、年度末を越えて少し落ち着きつつあるけど、GW明けぐらいまでは気が抜けないとなると、ココで昼食を取るタイミングと授業ぐらいしか、心も体も休まる時間がない気がする。

「えーつと、原田くん、だったよね？」

割と綺麗に巻けた気がする卵焼きをつまんでいると、後ろから声をかけられた。そちらに顔を向けると、さっきの授業で同じ班だった女子、

「たしか——」

「上坂。上坂碧。ちゃんと自己紹介したんだけど、聞いてなかったでしょ」

澁刺とした、いかにもな女子大生。取り巻き、という表現は失礼だろうけど、上坂さんの後ろに控えている感のある、キリッとした印象の背の高い女性が青柳さんで、その隣にいるスポーティな印象の女性が鈴木さん。確かに、グループワークの冒頭で自己紹介し合った気はするけど、顔と名前とを一致させるだけの興味は湧かなかった。

「隣、いい？」

上坂さんが、僕の向かいの席を指す。土曜日とは言え、それなりに座席が埋まっている学食で、奇跡的に人数分の席が空いていた。少し離れたところにも四人掛けの空席は見えるけど、無理やり断る理由、というか気力がない。

彼女は僕の返事を待つことなく、他の二人と共に僕の隣へ座った。上坂さんの醸すイケイケな雰囲気、主張の強い見た目に、少々の緊張が走る。化粧品か香水の匂いがフワツと鼻先をくすぐった。

彼女らは「いただきます」と一齐に食事を取り始めた。三者三様に、メニューを選んだらしく、それぞれ何がどうだのと、楽しそうにレポートし合っている。

「原田くんは、お弁当なんだ。お母さんの手作り？」

上坂さんが僕の方を見た。近さにドギマギしながら、「自炊だよ」と答えた。

彼女は、弁当のおかずを一つずつ指して、「コレも？ コレも？」と訊いた。

一々頷いて答えると、「へー、凄い」と言った。

「この辺、ちよつともらつてもいい？」

上坂さんは、生姜焼きの付け合わせに入れたポテトサラダの一角を丸く示した。

答えを迷っていると、「冗談、冗談」と彼女は笑った。

「でも、今度何か食べさせてよ。材料費は払うから」

「碧だけ、ずるい」と鈴木さんが口を尖らせた。

「その時は、私たちもお相伴に与らせてもらつていい？」

青柳さんがやや細い目を輝かせて言った。

「人に食べさせるようなもんじゃないよ」

「えー。残念」

上坂さんたちは、心底残念そうな表情を作った。その揃いつぶりが可笑しかったのか、すぐに笑い声が飛び交った。

楽しそうに笑う女子大生の中に放り込まれた僕は、全然食事が進まない。何をどうしてこうなったのか。昼休みの間に思い当たる節は見つけられそうになかった。

初出 令和三年五月五日 ノベルアップ+にて公開